

相 場 地 獄

(4月16日記)

あの世には地獄というものがあり、血の池や、針の山や、剣の樹で出来ているという。しかし、この世には明らかに、「相場地獄」というものがあり、それは泥沼で出来ている。AIJ 投資顧問の浅川さんが嵌まってしまったのも、相場地獄の泥沼だった。

オプションの「ストラングルの売り」という戦術が、安易にしかも頻繁にお金を稼げる為、損失無限大という知識はありながら、僅かの利益の為に膨大なリスクをとり続けた。それが一回のブラックスワンに出会うと、それまでの累積した利益を吹き飛ばし、それ以上の損失を蒙ってしまうのだ。そこからは相場地獄の始まりである。「取り返そう！取り返そう！」と、もがけばもがくほど、泥沼は深みに嵌まり込むようになっている。頭は真っ白になり、正常な思考が出来なくなる。心の中は「必ず取り返せ得る！取り返そう！取り返そう！」という焦りの叫び声だけだ。

「焦ることは生きることではない」とは誰の言葉だったか？

本間宗久は言う。「米商い、踏み出し大切なり。踏み出し悪しき時は、決して手違いになるなり。」「不利運の節、売り平均、買い平均決してせざるものなり。」「思い入れ違いの節は早速仕舞い、四、五十日休むべし」

このような卓見に達した本間宗久も実は、地元酒田に於いて、米相場で莫大な利益を上げたあと、大阪の堂島に出て相場を張り、完膚なきまでに、やられ、全財産を失ってしまった。それはなぜか？彼が故郷酒田を離れたのは、本間家の家督を継いだ相場を嫌う甥と、諍いをし追い出されたからであった。本間家という後ろ盾を失い、平静心を欠いた宗久は心中に怒りという情念に犯され、正常な判断力を失ってしまっていたからだ。

彼は、恥をしのいで故郷酒田に帰り、禅寺に籠もる。そうして、反省のあと、相場の本質につき思考を巡らす。そして有名な「風幡の説法」に出会う。

二人の修行僧が、風にはためく幟旗を眺めて言い争っていた。一人が「旗が動いている」というと、一人が「風が動いているのだ」という。そこに高僧がやってきて、「動いているのは、あなた方の心である」というのである。

宗久は、充分に「休み」、思索を重ねてから、相場の極意を掴み、改めて江戸に出て、相場に挑む。その後連戦連勝を重ね、後世に名を残すこととなる。そのような、血を吐く経験をした上での先の言葉なのである。

「米商い、踏み出し大切なり。踏み出し悪しき時は決して手違いになるなり。」「不利運の節、売り平均、買い平均決してせざるものなり。」「思い入れ違いの節は早速仕舞い、四、五十日休むべし。」千葉の県人 鎌田 留吉